

4. 代謝・内分泌疾患

向野義人、荒川規矩男. 肥満の耳針療法における味覚の変化 全日本鍼灸学会雑誌 1985; 34(3,4): 211-6.
医中誌 Web ID: 1986071708

1. 目的

耳針療法の際の味覚の変化及び右刺激と左刺激の効果差の評価

2. 研究デザイン

ランダム化比較試験 (RCT)

3. セッティング

福岡大学医学部第二内科、福岡、日本

4. 参加者

20-60歳の外来患者で、肥満度110%以上の単純性肥満の者。肥満の合併症のため薬物を内服している者、空腹時血糖110mg/dlを超える者及び症候性肥満は除外。

5. 介入

研究 A: Arm 1: 両側肺点治療群 (19名)。両側の肺点に2本ずつの皮内針を約1mmの深さに刺入し、絆創膏で固定し留置した。その後1週間毎に針を交換し、4週間治療した。

Arm 2: 右噴門肺点治療群 (20名)。右側の噴門と肺点に Arm 1 と同様の治療をおこなった。

研究 B: Arm 3: 右噴門肺点治療群 (13名)。右側の噴門と肺点に Arm 1 と同様の治療をおこなった。

Arm 4: 左噴門肺点治療群 (11名)。左側の噴門と肺点に Arm 1 と同様の治療をおこなった。

6. 主なアウトカム評価項目

食欲抑制効果及び体重と味覚の変化 (摂食量、空腹感、満腹感を6-7段階に分類した調査表を毎日記入。体重を毎週測定。味覚検査を治療前治療後1週、4週に施行)。

7. 主な結果

研究 A: 食欲抑制の著効率は Arm 1 で47.4%、Arm 2 で25%。平均体重減少量はそれぞれ1.7±0.2kg、1.5±0.3kg と Arm 1 の方が効果は大きかったが、有意な群間差はなかった。食欲抑制効果及び体重減少量が大きめで、塩味覚は Arm 1、Arm 2 とも過敏となった。

研究 B: Arm 3 では塩味覚閾値と体重減少量の間には有意な正相関 ($r=0.794, P<0.01$)があった。Arm 4 でも同様の傾向 ($r=0.536, P<0.1$)を認めたが、有意ではなかった。両群の分散に差がないにもかかわらず、Arm 3 と Arm 4 の回帰直線の傾きには有意差を認めた。また4週間の平均体重減少量は Arm 3 が1.3kg に対して Arm 4 は0.8kg であった。

8. 結論

耳針により塩味覚が過敏となった。右刺激と左刺激の間には有意差があり、右刺激がより有効であった。

9. 鍼灸学的言及

皮内針の留置部位は、石川式皮電計 PD-1 を用いて決められた。

10. 論文中の安全性評価

記載なし。

11. Abstractor のコメント

耳針療法による味覚の変化及び耳の右刺激と左刺激の効果差について検討した研究である。耳針による求心性刺激が味覚の伝導路と何らかの関係があることを推定させるという考察であるが、味覚を伝達する舌咽神経、迷走神経、鼓索神経及び大錐体神経が耳介にも分布していることを明らかにし、耳針による求心性刺激と味覚の伝導路の関係についても解明できるよう今後の検証が望まれる。刺激の左右差において、右刺激が有効であったが、本研究では耳針の効果が脳の優位半球との関わりを持つ可能性を示唆するに留まり、その機序は解明されていない。著者も述べている通り、今後検討すべき課題の1つである。今回の検討項目はどちらも初の検討であり、その結果についても興味深い。テーマを1つに絞り、結果に至った機序まで掘り下げた方が研究の焦点が明確になると考えられる。本文中にもある通り、肥満のみならず塩分摂取量とその病態に大きく関わる高血圧症等の諸疾患の治療にも応用できる可能性がある、臨床的にも意義深い研究である。

12. Abstractor

岡田明子 2010.12.27